

((故事成語)) (鉄の棒が研磨されて針になる→) うまずたゆまず努力を続ければ何事もいつかは成就する。

唐代の有名な大詩人李白は幼い頃、勉強が嫌いで、しばしば学校をさぼって街をぶらついた。

ある日、李白はまた学校に行かずに、街のあちをぶらぶら、こちをぶらぶらして、いつの間にか郊外に出た。

暖かい日差し、楽しげな鳥のさえずり、風に揺れる草花に、李白はすっかり心を奪われた、

「こんな天気の良い日に、朝から晩まで部屋にこもって勉強するなんて、退屈極まりないじゃないか！」

歩いていくうちに、一軒のぼろ屋の入り口近くに、棒のように太い鉄杵を磨いている、白髪のお婆さんを見つけた。

李白は近くまで行き、尋ねた、「お婆さん、何をしていますのですか？」

「この鉄杵を磨いて、刺繍針を作るのさ。」お婆さんは顔を上げ、李白ににっこりすると、またうつむいて鉄杵を磨き始めた。

「刺繍針？」李白は驚いた：「服を縫う刺繍針ですか？」

「もちろん！」

「でもこんなに太い鉄の杵、いつまで磨いたら細い刺繍針になるのですか？」

お婆さんは逆に李白に尋ねた。「水滴は石に穴を開けることができ、愚公は山を動かすことができたなら、どうして鉄杵を磨いて刺繍針を作ることができないと言えるかね？」

「でも、あなたはもうそんなに高齢ですし…」

「他人より努力すれば、できないことなどはない。」

お婆さんの話を聞いて、李白は恥ずかしさを覚えた。戻ってから、彼は二度と学校をさぼらず

毎日の勉強に格別に励んで、ついに歴史に名を残す「詩仙」となった。

【鉄杵磨針】の意味は：強い決意のもとで、努力を惜しまなければ、どんなに難しいことでも達成できることの喩え。